

機関番号：16101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730447

研究課題名（和文）

ひきこもり状態に対する臨床心理的地域援助システムのあり方に関する研究

研究課題名（英文）

The study on role of clinical psychological community care system for hikikomori

研究代表者

境 泉洋 (SAKAI MOTOHIRO)

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・准教授

研究者番号：90399220

研究成果の概要（和文）：ひきこもり状態で悩む人々が心理的支援を求めていることが明らかにされ、生活の質（QOL）が低下している実態が示された。また、近年注目されている、発達障害がひきこもりに強く関連していることが明らかにされた。さらに、家族を対象にした認知行動療法の有効性が示された。地域支援のあり方について検討するために、英国での Improving Access to Psychological Therapies Programme について実地調査を行った。

研究成果の概要（英文）：People who are suffering hikikomori (prolonged social withdrawal) seek psychological support. And their QOL (Quality of Life) was decreased. In addition, hikikomori were strongly related with developmental disabilities that attracted attention in late years. Furthermore, effectiveness of cognitive behavioral therapy for the families was indicated. We performed an on-the-spot survey about Improving Access to Psychological Therapies Programme in the U.K. to examine the way of the community support.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：地域援助

1. 研究開始当初の背景

ひきこもり状態に関する疫学調査によると、本邦においてひきこもり状態にある人（以下、ひきこもり本人）がいる世帯は26万世帯（0.56%）であるとされている（小山ら、2007）。2002年～2005年にかけてNPO法人全国ひきこもりKHJ親の会において申請者が行った調査によると、ひきこもり本人の男女比は概ね6：1であり、ひきこもり本人の平均年齢が上昇している可能性が示唆

されている。また、近年ひきこもり状態の背景に精神疾患の存在が指摘されていた（近藤ら、2006）。

ひきこもり状態の事例では、ひきこもり本人よりも家族の方が先に相談機関を訪れることが申請者らの研究から明らかにされている。ひきこもり状態への支援においては、ひきこもり本人の精神疾患の可能性を考慮しながら、家族支援を通してひきこもり本人を受療につなげることが重要となる。家族支

援においては、家族機能と地域援助システムの充実が重要となる。

申請者の研究において、家族のストレス反応が高いことが示され、家族の心身の健康を維持する支援として、家族を対象とした自助グループが効果を上げている。しかしながら、ひきこもり本人を受療につなげるための家族機能のあり方については明らかにされていない。また、ひきこもり対応ガイドライン（ひきこもりに対する地域保健活動のあり方に関する研究班、2003）が発行されて5年がたつ現在、精神保健福祉センター、保健所・保健センターが対応の中心になっているが、相談に至るまでの支援がきわめて不足しているのが現状である。

また、ひきこもり状態の問題は、本邦において多く認められており、諸外国では大きな社会問題となるまでには至っていない。こうした諸外国との違いは、ひきこもり状態に対する臨床心理的地域援助システムの違いによるものと考えられる。

これらのことを踏まえ、本申請においては本邦においてひきこもり本人が相談機関に至るまでを援助する臨床心理的地域援助システムのあり方について検討を加えた。

2. 研究の目的

初年度においては、ひきこもり状態にある人（以下、本人）とその家族の支援ニーズ、および本人が受療に至るまでの心理的過程について検討を加えた。支援ニーズにおいては、平成21年度から全国の都道府県と政令指定都市に新たに設置される「ひきこもり地域支援センター（仮称）」に本人と家族が求める支援について調査を行った。

平成21年度においては、ひきこもり状態にある人（以下、本人）とその家族の生活の質（Quality of Life）について調査を行った。また、ひきこもりの再発の実態やひきこもり本人のパソコン、携帯電話、ゲーム機等の利用について調査を行った。さらに、ひきこもりの行動論的メカニズムに関する実証的データ収集を行った。

最終年度、ひきこもり状態と発達に関連について検討を加えた。また、ひきこもり状態を維持させている家族関係に関する行動論的観点からの検討、さらにひきこもり状態にある人の就職不安に影響を与える要因について検討を加えた。

3. 研究の方法

初年度の調査では、全国35都道府県で開催されたひきこもり親の会において調査を実施し、本人を対象とした調査では、質問紙調査では92名を対象とした。家族を対象とした調査研究においては、429家族から得られた回答を解析した。

平成21年度の調査では、全国29都道府県で開催されたひきこもり親の会において調査を実施し、ひきこもり本人を対象とした調査では、質問紙調査では91名を対象とした。家族を対象とした調査研究においては、383家族から得られた回答を解析に用いた。

最終年度の調査では、全国28都道府県で開催されたひきこもり親の会において調査を実施し、ひきこもり本人を対象とした調査では、質問紙調査では82名を対象とした。家族を対象とした調査研究においては、332家族から得られた回答を解析に用いた。

4. 研究成果

本人を対象とした調査から、本人が同世代と交流ができる場所や心理的支援、そして就労支援を求めていることが示された。また本人の受療促進に関しては、相談をする事によるメリットが期待されると支援を利用する可能性が高まることが示された。

調査においては、家族の支援ニーズについて調査が行われた。調査の結果、家族は心理専門家によるカウンセリング、「ひきこもり」についての学習会・講座、本人が家庭外で活動できるための「居場所」を求めていることが示された。また本人の相談機関の利用やひきこもりの程度は家族機能と関連していることが示された。

本人を対象とした調査から、本人のQOLが低下している実態が示された。また、調査に回答したひきこもり本人は携帯電話を多く利用していることが明らかにされた。また、行動論的観点からの調査によって、調査に回答したひきこもり本人は一般大学生と比較して体験の回避の傾向が強いことが示された。

家族を対象とした調査から、本人同様に家族のQOLも低下していることが示された。また、家族調査において報告されたひきこもり本人はパソコンを多く利用しており、携帯を利用している人は半数に満たないことが示された。また、行動論的観点からの調査から、ひきこもり状態の家族においては、正の罰と負の罰が機能していない実態が明らかにされた。

調査に加え、英国にImproving Access to Psychological Therapies (IAPT) programmeの実地調査を行った。また、家族を介したひきこもり状態にある人の受療促進プログラムを実施した。

本人を対象とした調査から、ひきこもり本人の広汎性発達障害傾向が高い可能性が示された。また、本人は高い就職不安を抱えており、こうした就職不安は就職活動に対する自己効力感の低さや体験の回避が影響を与えていることが示された。

家族を対象とした調査から、本人同様にひ

きこもり本人の広汎性発達障害傾向が高いことが示された。また、家族関係を行動論的観点検討した結果、望ましいことを増やすことはできても望ましくない行動を減らすことが困難になっている現状が示された。

調査に加え、ひきこもり本人や家族を対象とした集団認知行動療法を実施し、その効果検証を行った。その結果、家族を対象とした介入においては、家族自身の機能が正常に保たれていることが効果を与えるための必要条件である可能性が示された。また、英国に Improving Access to Psychological Therapies (IAPT) programme の実地調査を踏まえた文献調査を実施した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

1. 境 泉洋・坂野雄二 2010 ひきこもり状態にある人の親に対する行動論的集団心理教育の効果 行動療法研究, 36, 223-232. (査読有)
2. 境 泉洋・滝沢瑞枝・中村 光・植田健太・石川信一・永作 稔・佐藤 寛・井上敦子・嶋田洋徳・坂野雄二 2009 子どものひきこもり状態に対する親の否定的評価とストレス反応の関連 カウンセリング研究, 42, 207-217. (査読有)
3. 境 泉洋・坂野雄二 2009 ひきこもり状態にある人の親のストレス反応に影響を与える認知的要因 行動療法研究, 35, 133-143. (査読有)
4. 近藤 直司・小林 真理子・宮沢 久江・宇留賀 正二・小宮山 さとみ・中嶋 真人・中嶋 彩・岩崎 弘子・境 泉洋・今村 亨・萩原 和子 2009 発達障害と社会的ひきこもり 障害者問題研究, 37, 21-29. (査読有)
5. 近藤直司・境 泉洋・石川信一・新村順子・田上美子佳 2008 地域精神保健・児童福祉領域におけるひきこもりケースへの訪問支援 精神神経学雑誌, 110, 536-545. (査読有)
6. 浅田みちる・境 泉洋 2008 ひきこもり状態の青年に対する親の関わり方に関する研究：母親への半構造化面接の分析 徳島大学総合科学部人間科学研究, 16, 125-143. (査読無)

[学会発表] (計12件)

1. 野中俊介・大野あき子・境 泉洋 2010 ひきこもり状態にある人の受療促進プログラムの効果：親を対象とした集団認知行動療法 日本行動療法学会第36回大会発表論文集, P206~P207. 2010年12

月5日, 愛知県産業労働センター

2. 水野治久・永井 智・末木 新・飯田敏晴・境 泉洋・古宮 昇 2010 援助要請研究の新たな展開：届かない援助をどう繋げていくか W15. 2010年9月20日, 大阪大学豊中キャンパス
3. Nonaka, S. & Sakai, M. 2010 Family Relationship and Help-seeking Behavior of Individuals with Hikikomori (Acute Social Withdrawal) 6st World Congress of Behavioural and Cognitive Therapy 2010 Pp.98. 2010年6月4日, Boston University
4. Sakai, M. & Nonaka, S 2010 Effectiveness of Cognitive Behavioral Intervention for Japanese Adolescents and Young Adults with "HIKIKOMORI" (Acute Social Withdrawal) 6st World Congress of Behavioural and Cognitive Therapy 2010 Pp.102. 2010年6月4日, Boston University
5. 川原一紗・境 泉洋 2009 来談に対する利益・コスト認知が来談行動に与える影響：ひきこもり状態にある人を対象とした質問紙調査による検討 日本行動療法学会第35回大会発表論文集, P234~P235. 2009年10月12日, 幕張メッセ
6. 大野あき子・境 泉洋 2009 大学生における援助要請行動の意志決定過程が友人への相談に与える影響 日本行動療法学会第35回大会発表論文集, P456~P457. 2009年10月12日, 幕張メッセ
7. 松本美菜子・境 泉洋 2009 地域若者サポートステーション利用者が抱える就職不安が精神的健康に与える影響：大学生との比較から 日本行動療法学会第35回大会発表論文集, P488~P489. 2009年10月12日, 幕張メッセ
8. Sakai, M., Kondo N., Miyazawa H., Kiyota Y., Kitabata Y., Kuroda Y. & Kurosawa M. 2008 The psychiatric background of Adolescent social withdrawal in Japan. 10st International Congress of Behavioral Medicine, P118. 2008年7月28日, 立正大学
9. 境 泉洋 2008 ひきこもり状態にある人の家族の支援へのニーズと利用状況 日本コミュニティ心理学会第11回大会発表論文集, P60~61. 2008年6月14日, 愛知学院大学
10. 川原一紗・境 泉洋 2008 ひきこもり状態にある人の相談機関に対するニーズと来談行動の関連 日本行動療法学会第34回大会発表論文集, P352~P353. 2008年11月2日, 日本教育会館
11. 杉山雅彦・飯倉康郎・境 泉洋・小

- 島なみ子・中川彰子 2008 「問題」を持つ人の「周囲」へのサポート 日本行動療法学会第34回大会発表論文集, P78~P79. 2008年11月2日, 日本教育会館
- 1 2. 佐藤 寛・杉浦義典・境 泉洋・高橋 史・本岡寛子・伊藤絵美 2008 問題解決療法の理論と実践:サイコセラピーの融合と社会的貢献への提言 日本行動療法学会第34回大会発表論文集, P104~P105. 2008年11月2日, 日本教育会館

[図書] (計1件)

1. 境 泉洋 2008 ひきこもり 内山喜久雄・坂野雄二(編) 認知行動療法の技法と臨床 日本評論社 Pp.254-261.

[その他]

ホームページ等

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/motohiro/>

(翻訳)

1. アーサー・フリーマン(責任編集) 内山喜久雄・大野 裕・久保木富房・坂野雄二・沢宮容子・富家直明(監訳) 2010年 認知行動療法事典 日本評論社

(書評)

1. 境 泉洋 2008 人それぞれのゴールのあり方:ひきこもり当事者の経験を「理解」する視点 図書新聞, 2856, P5.

(教材)

1. ひきこもり支援相談士養成講座 2009年 社団法人ひきこもり支援士認定協議会

(報告書)

1. 境 泉洋・川原一紗・NPO法人全国引きこもりKHJ親の会 2008 「引きこもり」の実態に関する調査報告書⑤:全国引きこもりKHJ親の会における実態 徳島大学総合科学部境研究室, 総項数78.
2. 近藤直司・宮沢久江・境 泉洋・清田吉和・北端裕司・黒田安計・黒澤美枝・宮田量治 2008 思春期ひきこもりにおける精神医学的障害の実態把握に関する研究 厚生労働科学研究費補助事業(こころの健康科学事業) 「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(主任研究者 齋藤万比古) 平成19年度総括・分担研究報告書 Pp.49-63.
3. 境 泉洋・川原一紗・木下龍三・久保祥子・若松清江・NPO法人全国引きこもりKHJ親の会 2009 「引きこもり」の実態に

関する調査報告書⑥:全国引きこもりKHJ親の会における実態 徳島大学総合科学部境研究室, 総項数87.

4. 近藤直司・宮沢久江・境 泉洋・清田吉和・北端裕司・黒田安計・黒澤美枝・宮田量治 2009 思春期ひきこもりにおける精神医学的障害の実態把握に関する研究 厚生労働科学研究費補助事業(こころの健康科学事業) 「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(主任研究者 齋藤万比古) 平成20年度総括・分担研究報告書 Pp.63-78.
5. 境 泉洋・野中俊介・大野あき子・NPO法人全国引きこもりKHJ親の会 2010 「引きこもり」の実態に関する調査報告書⑦:全国引きこもりKHJ親の会における実態 徳島大学総合科学部境研究室, 総項数87.
6. 境 泉洋・堀川 寛・野中俊介・松本美菜子・平川沙織・NPO法人全国引きこもりKHJ親の会 2011 「引きこもり」の実態に関する調査報告書⑧:全国引きこもりKHJ親の会における実態 徳島大学総合科学部境研究室, 総項数88.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

境 泉洋 (SAKAI MOTOHIRO)

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アント・サイエンス研究部・准教授

研究者番号:90399220

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: